

日本語の補足節と代用形

—— 引用節とその周辺 ——

Some Thoughts on Complement Clauses and Pro-forms in the Japanese Language

阿 部 忍

キーワード：補足節、引用節、代用形、「そう」、「そうと」

要 約

本稿では日本語の引用節を中心とする補足節に対する代用形、およびそれらと共起する述語との関係を記述、分析する。知覚・思考を表す述語のうち、「知る」のみが「そう」と共起せず、類似する「気づく」「分かる」などの述語は「そう」と共起する。このような文法的ふるまいには、「知る」と「気づく」「分かる」などの間にある含意関係が関わっているという分析を提案する。

0. はじめに

本稿では日本語の補足節、とりわけ引用節と、その代用形、およびそれらと共起する述語の文法的ふるまいについて記述する。

補足節とは、すなわち主文の述語が項として要求する節であり、例えば次の(1)(2)における下線部がそうである。

(1) ユウは明日映画に行くつもりだと言った。(引用節)

(2) イチローはヤンキースに移籍したことを後悔していない。(名詞節)

(1)の下線部は補文標識「と」をともなう引用節であり、(2)は補文標識「こと」をともなう名詞節である。

ところで上の(1)(2)の補足節は、代用形「そう」「それ／そのこと」によってそれぞれ(3)(4)のように置き換えることができる。

(3) ユウはそう言った。

(4) イチローは {それ／そのこと} を後悔していない。

それゆえ、原則として「と」で終わる引用節は「そう」、「こと」で終わる名詞節は「それ」「そのこと」で代用できると記述すればよいように思われる。

ところが、上の原則に反する例も存在する¹⁾。次の(5)(6)を見てみよう。

(5) 監督はイチローが日本人だと知っている。

(6)*監督はそう知っている。

(6)から明らかであるように、(5)における引用節を「そう」で置き換え、「*そう知っている」とすると、容認不可能な文となる。

そこで、どのような場合にどのような代用形が使用できるか等について、以下、できるだけきめ細かな記述を行っていくこととする。

1. 引用節と代用形

1. 1 引用節と「そう」

ここでは、引用節の「そう」「そうと」への置き換え可能性についてみていく。

まず前節の例文(6)で見たような共起制限、すなわち「そう」が述語「知る」と共起しないという現象は、阿部(2009)が指摘している(pp.82-84)。同論文の例文(28a~c)(29a~c)を次のそれぞれ(7a~c)(8a~c)として再掲する。

(7) a. ミキはヒロが博学であると |思っている／考えている／知っている|

b. ユイもそう |思っている／考えている|。

c. *ユイもそう知っている。

(8) a. ユイはヒロが天使のような性格だと |思っている／考えている／知っている|

b. ダイスケはそうは |思っていない／考えていない|

c. *ダイスケはそうは |知らない／知っていない|

上の(7c)(8c)が容認不可能であることから、やはり「そう」が「知る」と共起できないことが分かる。また、(7b)(8b)が容認可能であることから、「そう」と「思う」「考える」との共起には問題がないことが見てとれる。

阿部(2009)はこのような現象を説明するため、「そう」の有する様態副詞としての性格に着目する。すなわち、「そう」には共起する述語が多様性、柔軟性のある動きを表すことを要求するといった選択制限があると仮定するのである。

そのような仮定の下で「知る」「思う」「考える」といった述語の意味を比較してみると、確かに「知る」は「真である命題を知覚する」といったきわめて限定的な動きを表すのに対し、「思う」「考える」はより多様で柔軟な動きを表すと言えそうである。そうであれば、「知る」が「そう」と共起できないのは、「そう」の要求する選択制限を破るからということになるのである。

そこで、この議論を補強するような文法現象をここでさらに考えてみよう。次の(9)~(11)を見られたい。

(9) 君はどう思ってるの？

(10) 君はどう考えてるの？

(11)* 君はどう知ってるの？

上の(9)(10)が容認可能なのは「思う」「考える」がかなり柔軟で多様な思考活動を表し得るからであろう。言い換えれば、「思う」「考える」という思考活動にともなって生み出される命題²⁾は、動作主（思考者）がある程度意志的、主観的にコントロール可能なものであり、ということである。それに対して、「知る」の表す動きにはそのような柔軟性、多様性（あるいは意志性、主観性）をゆるす余地がないゆえに、(11)は容認不可能な文となると考えられる。

1. 2 引用節と「そうと」

前節 1. 1 では「そう」と述語「知る」「思う」「考える」との共起関係、およびこれらの述語の意味について考察してきたわけであるが、では、「そうと」とこれらの述語との共起関係はどうであろうか。次の(12)(13)から分かるように、「そうと」は「思う」「考える」「知る」のいずれとも共起することができる（これらは阿部（2009）の例文（28d）（29d）の再掲である）。

(12) ユイもそうと {思っている／考えている／知っている}

(13) ダイスケはそうとは {思っていない／考えていない／知らない／知らなかった}

ちなみに、(12)のように「そうと」を含んだ肯定文は、(13)のような否定文と比較して若干すわりが悪いようである。しかしそれでも容認性が低いとは言えない。また、次の(14)のように条件節などの従属節内に「そうと」が含まれた文は、否定文と同様すわりがよいようである。

(14) そうと {知ったら／考えたら／思ったら} 放っておくわけにはいかない。

それはともかく、前節で見たように「*そう知っている」は容認不可能であるのに対し、「そうと知っている」「そうとは知らなかった」は容認可能であるという事実は注目に値する。なぜこのような文法的ふるまいがあるのか、理由は必ずしも明白ではない。しかしながら、「そうと」に含まれる「と」はいわゆる「引用の『と』」と呼ばれるものであり、この「と」が「そう」の代用する内容にある種の客観性、共有性を担保すると考えることはさほど無理なことではないだろう。

1. 3 「知る」と類似する述語と「そう」「そうと」「それと」

1. 1 および 1. 2 で見たように、「知る」は「そう」とは共起せず、「そうと」とは共起する。そして「知る」が「そう」と共起しないのは、「知る」の表す動作に柔軟性、多様性（あるいは意志性、主観性）がないからであると考えられる。

しかし、「知る」とよく似た意味の述語「気づく」「見抜く」「分かる」「悟る」³⁾はどうだろうか。次の(15)(16)を観察してみよう。

- (15) a. 国民は原発は危険だと {知った／気づいた／見抜いた／分かった／悟った}。
 b. 国民はそう {＊知った／気づいた／見抜いた／分かった／悟った}。
 c. 事故前にはそうは {＊知らなかった／気づかなかった／見抜けなかった／分からなかった／悟れなかった}。
 (16) a. 国民はそうと {知って／気づいて／見抜いて／分かって／悟って} 立ちあがった。
 b. 事故前にはそうとは {知らなかった／気づかなかった／見抜けなかった／分からなかった／悟れなかった}

(15b) (15c) から、「気づく」「見抜く」「分かる」「悟る」はいずれも「そう」と共起可能であることが分かる。そしてこれは「知る」が「そう」と共起できないことと対照的である。(また、(16)から「知る」を含めた5つの述語すべてが「そうと」と共起できることが分かる。)

ではなぜ、類似する意味の述語の中で「知る」だけが「そう」と共起できないのであろうか。以下、その理由について考えてみよう。

まず、「知る」を含めた上の5つの述語はいずれも「真である命題を知覚する」といった中核的意味を有すると言えるだろう。しかし、「知る」が純粹にこの中核的意味だけを意味するのに対し、他の4つの述語はこの中核的意味に加えて各々“プラス α ”の意味を有していると考えられる。例えば、「気づいて」いれば必ず「知っている」ことになるが、その逆は必ずしも真ではない。「私はそうと気づいていますが知りません」というのは奇妙な言明だが、「私はそうと知っていますが気づいたわけではありません（他人に教えてもらったのです）」と言うことはできる。つまり、「気づく」「見抜く」「分かる」「悟る」は「知る」を^{含意する}のである。

では「知る」以外の4つの述語が有するプラス α の意味とは何であらうか。それらを正確に記述することは困難だが、おおざっぱに記述すれば、たとえば次の(17)のようになろう。

- (17) a. 「気づく」：それまで関心の外にあったことを何かのきっかけで「知る」
 b. 「見抜く」：表面だけを見ていては分からないことを鋭く観察して「知る」
 c. 「分かる」：すでに持っている知識に結びつく形で「知る」
 d. 「悟る」：知るべきことをはっきりと理解して「知る」

上の(17)の記述は甚だ不十分であり異論もあろうが、いずれにせよ、「気づく」「見抜く」「分かる」「悟る」といった述語が「『知る』+ α 」の意味を有する（「知る」を^{含意する}）というここでの分析が理解されれば十分であらう。

なお、この節で取りあげた5つの述語はいずれも「それと」という形式と共起する。例えば次の(18)のような文である。

- (18) それと {知って／気づいて／見抜いて／分かって／悟って} 狂喜した。

この「それと」は上のような例においては「そうと」と交替可能であり、興味深い。ただし、他の述語、例えば「思う」「考える」などとは共起しないことは(19)を見れば明らかである。

- (19)＊それと {思っ／考え／落胆した}。

1. 4 「そのように」

さて、ここでは「そのように」という形式の特徴を考えてみたい。まず言及しておくべきことは、「そのように」が婉曲的なニュアンスを表す形式であるということである。たとえば、次の②0を見てみよう。

- ②0 a. マイはマスコミは信用できないと言った。
b. ユウキもそう思った。
c. ユウキもそのように思った。

(20a) に続けて (20b) あるいは (20c) を発話したとしよう。(20b) と (20c) を比較すると、(20c) の方がより婉曲的であり、より幅の広い柔軟な解釈を許す。つまり、(20c) では、ユウキの心の中で生み出される命題は「マスコミは信用できない」という命題そのままでも、それに類する命題、たとえば「マスコミはよく間違った情報を流す」「新聞やテレビはいい加減だ」などといった命題でも構わないであろう。

このような特徴を踏まえた上で、「そのように」がどのような述語と共起するかを次の②1で見てみよう。

- ②1 a. アヤは男なんてみんな信用できないと言った。
b. *? ミキもそのように {知った／気づいた／見抜いた／分かった}。
c. ミキもそのように {悟った／思った／考えた}。

(21a) に続けて (21b) または (21c) を発話したとすると、(21c) に比べて (21b) の方が容認性が低い。もちろん、このようなテストは (21a) のような位置にどのような文を置くかによって結果が変わる可能性もある。しかし、傾向としては「そのように」が「知る」のような柔軟性、多様性のない動きを表す述語と共起しにくく、「思う」「考える」のような柔軟性、多様性（あるいは意志性、主観性）のある動きを表す述語と共起しやすいということは言えるだろう。

ところで「悟る」についてはどうだろうか。「そのように悟った」と言えるのは、類似する「分かる」などよりも主観性が高いからとも考えられるが、より詳細な分析は後の考察に委ねることとする。

1. 5 知覚・思考を表す述語と「こと」節、および「それ」

ここでは、ここまで言及してきたような知覚・思考を表す述語が、補文標識「こと」をとともなう名詞節をとったり、代用形「それ」をとったりするケースを見る。

まず、次の②2②3を観察してみよう。

- (22) a. ヒロはリサがスパイであると {知った／見抜いた／悟った}。
 b. ヒロはリサがスパイであることを {知った／見抜いた／悟った}。
 c. ヒロはそれを {知った／見抜いた／悟った}。
 (23) a. ヒロはリサがスパイであると {思った／考えた}。
 b. ヒロはリサがスパイであることを {思った／考えた}。
 c. ヒロはそれを {思った／考えた}。
 d. ヒロはそのことを {思った／考えた}

上の (22a) (22b) から分かるように、「知る」「見抜く」「悟る」などの知覚を表す述語は、引用節と「こと」をともなう名詞節とを、ほぼ同じ意味を保ったまま交替させることができる。またさらに、(22c) のように「こと」をともなう名詞節を「それ」で代用することができる。

ところがそれに対して、(23a) (23b) の比較から明らかになるように、「思う」「考える」などの思考を表す述語は、引用節と「こと」をともなう名詞節とを交替させると意味が変わってしまう。(23b) における「リサがスパイであること」はヒロの思考の内にある命題ではなく、思考のテーマとでもいべきものである。

また、(23c) のように「それを思った／考えた」とすると、(23b) とはニュアンスが変わってしまい、「リサがスパイである可能性を思った／考えた」に近い意味になる。(23b) に対応するのは (23c) ではなく、「そのこと」を用いた (23d) であろう。

なお、限定的ながら、「それ (を思った)」が引用節と対応するように見えるケースも存在する。例えば、次の (24) のような例である。

- (24) a. 学生A：「いやあ、あの時はさすがに先輩もう止めればいいのにつて思ったよ」
 b. 学生B：「ああ、それは俺も思った」

1. 6 知覚・思考を表す述語と代用形の共起制限についてのまとめ

ここまで述べてきた知覚・思考を表す述語と代用形の共起制限について、ここで表にまとめておこう (表1)⁴⁾。

表1 知覚・思考を表す述語と代用形の共起制限

	それを	そうと	そう	そのように
(i) 知る	○	○	×	×
(ii) 気づく／見抜く／分かる	○	○	○	×
(iii) 悟る	○	○	○	○
(iv) 思う／考える	#	○	○	○

表1の左の列における(i)~(iii)はいわゆる叙実述語 (固定叙実述語⁵⁾) であり、(iv)は非叙実述語⁶⁾ である。数字が若いほど (表の上に行くほど) 柔軟性、多様性がない述語となる。

また、いささか思弁的になるが、最上段における「それを」～「そのように」は、左に行くほど客観的であり、右に行くほど主観的であると考えられる。なぜなら「それ」と言えるためにはそれが指示する内容が客観的に把握されていなければならない一方、「そのように」が指示する内容は、対応する引用節と大まかに、主観的に一致しているだけでよいからである。さらにまた、「そうと」は引用の「と」が付加されていることにより、「そう」よりも客観性、共有性の高い内容を受ける形式となっている。

2. 代用形と取り立て

さて、ここでは、「そうとは」「そうとしか」といった、代用形に取り立て助詞が付加された形式について少しばかり記述しておこう。

まず、「そうとは（そうとも）」は「そうと思う」の否定である「そうとは思わない」のような句において用いられるだけでなく、「そうとは限らない」のような、半ば慣用化した表現にも見られる。例えば次の(25)を見てみよう。((25c)の「 ϕ 」は音形に現れない要素を表す。)

- (25) a. ブラジルには逆立ちしても勝てないよね。
b. いや、そうとは限らないだろ。
c. ϕ とは限らないだろ。
d. *うん、そうと限るね。
e. *ブラジルには逆立ちしても勝てないと限る。
f. ブラジルには逆立ちしても勝てない、とは限らない。

上の(25a)に続けて(25b)(25c)のようには言えるが、(25d)のようには言えない。また(25f)は容認可能だが、(25e)は容認不可能である。ゆえに、述語「限る」は否定の形(「限らない」)でのみ引用節をとり、その引用節は「そうとは」「 ϕ とは」などで代用されるということが分かる。

また、「そうとしか」であるが、「しか」という否定対極表現が付加されているので、次の(26)に見るように当然否定述語としか共起しない。また、「*そうしか」という形式は通常許されない。

- (26) a. あいつは絶対独裁者になろうとしていると思う。
b. そうとしか思えないね。
c. * そうとしか思うよ。
d. *? そうしか思えないね。

3. 名詞節、間接疑問節と代用形

ここでは「こと」や「の」をともなう名詞節、および「か」をともなう間接疑問節と、代用形との共起関係について見ていく。

まず、(27a) のような「こと」をともなう名詞節は、(27b) に見るように代用形「それ」「そのこと」で置き換えることができる。

- (27) a. アキは彼女と別れたことを後悔している。
b. アキは {それ／そのこと} を後悔している。

それに対して、(28a) のような「の」をともなう名詞節は、(28b) から明らかであるように「それ」で置き換えることはできるが、「そのこと」で置き換えることはできない。

- (28) a. アキはボールがバックスクリーンを直撃するのを目撃した。
b. アキは {それ／*そのこと} を目撃した。

次に、「か」をともなう間接疑問節は、(29b) に見るように、「それ」で置き換えることはできるが、「そのこと」で置き換えることはできない。

- (29) a. パーティーに何人出席するかを教えてください。
b. {それ／*そのこと} を教えてください。

また、(30) のように間接疑問節が遊離した文においても、「それ」が共起する。

- (30) 生きるべきか死ぬべきか、{それ／*?そのこと} が問題だ。

4. まとめ

以上、本稿では補足節、特に引用節を中心に、それらを代用するいくつかの形式がどのような述語と共起するか、記述を行った。

知覚・思考を表す述語のうち、「知る」のみが唯一「そう」と共起せず、「気づく」「分かる」といった類似する述語は「そう」と共起するという現象は非常に興味深い。本稿では「気づく」「分かる」などの述語が「知る + α 」の意味を有するという点からの分析を提案した。

補足節およびその代用形に関連する文法現象を一つ一つ掘り起こして記述する段階の先に、より生産的な理論を展開することが望まれるが、それについてはまた稿を改めることとする。

注)

- 1) このような現象の存在は阿部 (2009) 第3節で指摘している。
- 2) 阿部 (2009) ではこのような命題を「産出命題」と呼んでいる。
- 3) 「知る」を含めたこれらの述語は阿部 (2009) で「固定叙実述語」と呼ばれるグループに属する。詳しくは阿部 (2009) を参照のこと。
- 4) 表1では「それを／それに／それが」という3つの形式を「それを」に代表させてある。また、表中の「#」は、「それを」が対応する「～ことを」とはニュアンスの異なる内容を表すということを示している。
- 5) 6) 叙実述語、固定叙実述語、非叙実述語については、阿部 (2009) を参照のこと。

参考文献

- 阿部 忍（1999）「引用節のタイプ分けに関わる文法現象」『山手国文論攷』第20号、pp.47-62、神戸山手女子短期大学国文学科
- 阿部 忍（2003）「補文標識「の」「こと」に関する若干の考察」『山手国文論攷』第23号、pp.35-47、神戸山手女子短期大学日本語・日本文化学科
- 阿部 忍（2009）「補文標識「と」「こと」と命題の規範的構造具現」『神戸山手大学紀要』第11号、pp.75-87、神戸山手大学
- 井上和子（1976）『変形文法と日本語（上）』大修館書店
- 久野 暲（1973）『日本文法研究』大修館書店
- 日本語記述文法研究会編（2008）『現代日本語文法 6 第11部 複文』くろしお出版
- 橋本 修（1990）「補文標識「の」「こと」の分布に関わる意味規則」『国語学』163、pp.1-12、国語学会
- Chomsky, Noam（1986）*Knowledge of Language: Its Nature, Origins, and Use*, New York: Praeger.